

『規則論』で明らかにして以降、デカルトにとって学知の主要な方法は直観と演繹の二つだった(第三規則)。単純で疑い得ない確実性をもたらす直観による認識に対し、演繹には困難が伴う。確実な真理から必然的に結論されるはずの演繹に、なぜ問題が生じうるのだろうか。それは第一に、演繹がときに非常に長い推論の連鎖を構成する結果、初めの認識と最後の認識との関係がわかりにくくなるためである。この責は主に記憶力の弱さに帰せられるものだが、この弱点は、迅速で連続的な「思考の運動」(第七規則)によって補完することが可能である。

これに対し、第二の問題はより難しく、直観で正しく認識できない事物に面した際に立ち止まらず、演繹を継続した際に生じる。屈折線を研究しようとする人が数学しか知らず、光線を媒介する物体や光の作用等に関する自然学を顧みようとしない例などがそれに当たる(第八規則)。認識が純粹知性だけでなく、感覚と想像に関わる場合の困難について、デカルトは早くから知悉しており、その解決策として、感覚による認識すべてを図形に還元する方法を唱えた(第十二規則)。これは事物の比較を容易にし、相互の比例関係において知識を連結するための斬新なアイデアだが、これは完全で合理的な演繹だけから成り立つ数学(第二規則)を基盤とし、認識一般に拡大した方法である。

このように予め自然学を想定して発案されたにも拘らず、この方法はデカルト自然学で実際に用いられることは無かった。その主な理由は三つ考えられる。まず、自然学は幾何学上に立脚しているにもかかわらず、自然現象は幾何学に還元しきれないことにある。その顕著な例は空気の動きで、落体問題を幾何学のみで考察していたデカルトはやがて、物体の運動を考えるには空気の複雑な影響を考慮に入れずには不可能であることに気づき、これを幾何学的に表すことを断念した。この空気の運動の考察こそ、やがて微細物質の理論を形成するにあたって大きな役割を果たし、同時に、ガリレオ、ケプラーやニュートンの自然学とは異なり、数学的に還元されないデカルト自然学の独自の体系の核を成すものとなった。

次に、これと密接に関係した方法上の理由が挙げられる。デカルトは自身の自然学を「第一原因から演繹された結果」(『方法序説』第六部)と表明したが、その実際の方法は比喻、類推、仮定、経験等を多様に織り交ぜた推論で成り立っており、一般的な意味での演繹からはほど遠いものだった。その結果、「演繹」による幾何学的な厳密さを期待した人々から、デカルト自然学は論証されていないとの批判を受けることになる。これに対してデカルトは、幾何学の論証と自然学の論証を区別し、前者の后者への適用を不可能と考え、后者は、経験に反しない首尾一貫した論理があれば成り立つとした(AT II, 141,22-144, 2)。

このような論証の考えは自然学だけでなく、『方法序説』では不十分だったとデカルトが自覚する形而上学を展開する上でも活かされ、論証の方法を分析と総合の二つに絞ることになる。すなわち、形而上学を「教えるために最善の道」である分析は『省察』で、「幾何学者たちの用いた総合」(「第二答

弁)は「第二答弁」末尾と『哲学原理』で採用されることになるわけだが、このように手を替え品を替え、デカルトが論証に腐心したのはなぜだろうか。

これは自然学で方法を変えた三つめの理由とも深く関わるが、デカルトの主目的が真理の発見から、真理の根拠の提示へと変わったからである。もし『規則論』以後、演繹の語が著しく減少したのであれば(D. Clarke[1982], p. 75, n.28)、その理由は、自然学や形而上学の研究によって真理を発見し得たデカルトの目標が、「私を説得したのと同じ根拠で他の人も説得する」(『省察』序文)ことにその重心が移行したためであろう。つまり端的には、デカルトの主な関心は真理を「説明する」ことに移ったのである。

デカルトにおいて説明とは、狭義では原因が結果を説明することを示し、翻って結果は原因の正しさを証明することになる(『序説』第六部)。しかし広義ではそれだけに留まらず、原因-結果の一連の説明と論証は、また全体としてデカルトの理論を「よりよく説明する」(AT II, 198, 28)ために役立つことになる。比喻や類推等による自然学の方法や、書簡による度重なる論争、興味の無かったはずの著作の出版等の目標はつまるところ、自身で発見した真理の説明と、それによる読者の説得にあった。このことは、『規則論』以後のデカルトの著述において、「説明」の語そのものの現れと、説明に割かれた分量が多いことから見てとれよう。

しかし、ヘンペルのように厳密な説明モデルを主張する観点で見れば、デカルトのとりわけ自然学に見られるような説明方法は科学的に厳密ではなく、単なる「説明スケッチ」(Hempel[1965], p. 424)にすぎないとも言えよう。デカルト自身、『哲学原理』の末尾で、自らの自然学の説明が実際の自然物とは異なり得る可能性を否定してはいない(IV, 204)。しかし、このような誤り得るかもしれない「説明スケッチ」は、デカルト自然学の原理である形而上学の真理性まで影響を受けまいよう、自然学と形而上学の「演繹的な連結を緩める」(Clarke, op.cit., p. 101)ために画策されたものだったのだろうか。果たしてデカルト自然学は、それほど不確実なものだったのだろうか。

「説明」に関わるこのような問題は、方法上だけに留まらず、デカルト哲学の根本に関わってくる。すなわち、デカルトが説明によって何を目指したかを追うことは、デカルトが自らの哲学体系の完成のために何をめざしたのかという点と不可分の問題である。デカルト自然学は、渦動説の誤りがニュートンによって明らかにされたことで、その根幹が完全に覆された。しかしケプラーやガリレイ、ニュートンさえも成しえず、とりわけニュートンが晩年追い求めていた哲学体系の樹立において、デカルトは独自の達成を果たした。それがどのようなものだったのか、演繹と論証、そして説明という観点から明らかにすることが本発表の目標である。

#### [文献]

- Desmond M. Clarke, *Descartes' philosophy of science*, 1982.
- Stephen Gaukroger, *Cartesian logic*, 1989.
- Carl Hempel, *Aspects of scientific explanation*, 1965.
- Ernan McMullen, "Explanation as Confirmation in Descartes' Natural Philosophy", 2008., etc.